



TITLE:

リック天文臺から

AUTHOR(S):

上田, 穰

CITATION:

上田, 穰. リック天文臺から. 天界 1930, 10(113): 327-331

ISSUE DATE:

1930-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161558>

RIGHT:

リック天文臺から

この前このリック天文臺へ上つて來たのは 四月十二日、丁度月蝕があるといふ晩でした。午前十一時すぎに バークレイを出發し、オークランドを経て、順路サンノーゼに向ひ、二十哩の山道を辿つて 四時頃に山頂へついたことでした。丁度 Mrs. Aitken の嚴父がなくなられて、御夫妻でその朝下山せられたとのことでしたが、ライト氏（火星の寫眞で御なじみのライト氏）が留守居役で我々兩人をいろいろと御親切にもてなされ案内をしてくれたことでした。

この日は土曜日で、定例の觀覽日であつたのですが、生憎と fog で月蝕の觀測も出來ず、それでも數人來てゐた觀覽者と大望遠鏡の外観だけ見て歸るといふ譯でした。ジェフアース氏がその晩の案内當番で、案内せられて大ドームの床へ下り、James Lick の遺骸を葬つてある場所へ入つた時には自から襟を正さざるを得ませんでした。同氏は バークレイからの御なじみですが、兎角西洋人の名前は記憶しにくいので、家内の符牒によると「目」といふアダ名がつけてあつて、我々兩人の間に限つてはそれで通用してゐるのです。

次で、其日ライト氏を尋ねて來てをられた U. C. のルコンテ教授夫妻と一緒に、十二時望遠鏡ドームから時計室子午環室と案内せられ、火星寫眞の原板も見せて貰つたことです。

その晩は dormitory で平和な夜をすごし、次の日は小雨の様な fog でしたが、その中をライト氏に方々案内して頂き、特に Crossley reflector を詳細に説明して頂いて、興味津々たるものでした。其の上、お午はお宅で温順貞雅な Mrs. Wright のおもてなしで御馳走になり、實にいゝ氣分にひたつて下山したのです。

因にその節は例の日蝕の前のことで、Dr. Moore, Menzel の二氏は家族共々 Camptonville の觀測地へ出掛けて留守であり、只 Neubauer 氏はゐられた由ですが御會ひませんでした。

七月一日、住みなれたパークレイの假寓をたゞんで、この山へ引き越して来ました。片附けに手間取つて、パークレイを立つたのが午後四時半、しかしこの度は道も心得てゐるし、御者君 Mrs. Driver も山道になれたので、案内に時間をとらず、七時半頃海拔 4209 呎の山頂にたどりつき、秘書ミス・ボトキンの御世話で、dormitory の一室に落ち附くことになりました。

明けて二日の朝、本館で新臺長 Dr. Aitken にお目にかゝりました。心易く我々を引見して、兼ねて自分が書面で申入れてあつた希望に應ずる様な、こまごまの指令を與へてくれ、尚ほ詳しくは Dr. Trumpler, Neubauer に合ふ様にいふことで、自分は悉く満足したことです。そして言葉をかへて Aitken 氏は「さて Mrs. Ueta は lady 達に合つて、busy で且つ happy である様に」といつてくれました。それからわざわざ私のためにくれた部屋に案内してくれ、建物の key を渡されたのでした。

新臺長と書いたので、少しくその説明を附加して置ませう。今迄は Dr. Campbell が U. C. 詳しくは University of California の總長であり、且つ Lick Observatory の臺長であつたのですが、今度キャンベル氏は總長を辭され、それと同時に President Emeritus, Director Emeritus, Astronomer Emeritus に推されましたが、それがこの七月一日から effective になり、今迄 Associate Director であつたエイケン博士が本當の臺長となつたのです。

やがて Dr. Trumpler に會ひ、自分の希望をのべ、Crossley を使用するについて同氏の指導を仰ぐことにしました。そして家内も一緒に、同氏の office から寫真室倉庫と案内せられましたが、同氏の部屋で大ゲサな又武骨な measuring apparatus があつたので、「Einstein 効果の乾板を測定したのはこれですか」と聞くと、果してそうだといふ返事でした。

晝から Crossley に案内せうといふので、二時十五分前に約束通りその部屋にゆくと、チャンと待つてゐてくれて、すぐドームへ行き、そして詳しく説明を受けました。案内書によると口径 36 吋即ち 92mm、鏡は Grubb の製作にかゝり、mounting は Common によるとあつて、天文年鑑にある

表と少々齟齬してゐます。Dome の廻轉, platform の上下は皆電氣操作で、赤經のクランプ及び微動も電氣式です。しかし赤緯の方は手でやります。時計仕掛けの捲き上げは自働的に行はれ、三十分置き位にゆく様です。特に變つてゐると思ふ點は赤道運動の仕掛けで、見たところ 6 呎位の半徑の二つの扇形が、お互に反對の方向に動く様になつてをり、その内の一方のものが仕事をしてゐます。そして極端までゆくと、自働的に clamp をゆるめ、しめ直して今度は今迄と反對の方向に動き、これ迄働かなかつた方の扇形が仕事を始め、いつも同じ方向に望遠鏡を廻轉してゆく仕掛けであります。これは 70 分置きに二つの扇形が代るものと見ました。

すべてこのドーム内の裝置は直流で動くので、motor-generator をたえず動かしてゐるのも奇觀です。

見終つて、すぐドームの近くにあるトランブラー氏の家を訪ひ、夫人にお目にかゝりました。女のお子三人、男の子二人といふ子福者です。一番上の十二位のお嬢さんは 近くスキスへ勉強にゆかれるとのことで、その健な氣さに驚きました。

晩食後 Miss Slocum の案内で、われわれは東の峯の方へ散歩しました。そして大體山上の地理を理解しました。この山は 三つの峯からなり、その西塔の頂上に本館と並んで 75 呎ドーム、12 時望遠鏡があり、子午環室がある。クロスレイ及びトランブラー、キャンベル、ノイバウワー 諸氏の官舎は少し西寄りの低い場所に立つてゐます。他の 二つの峯 Kepler 峯 (海拔 4260 呎) と Copernicus (4390 呎) は西塔から半哩程東の方に相接してあり、これを東塔を形成してゐると見たいのです。こゝに全山の水を給するタンクがあり、工場、小學校、また Drs. Menzel, Moore, Aitken, Wright, Jeffers 諸氏の官舎が並んでゐるのです。Copernicus 峯山には以前大ドームの床の昇降のために使つた水槽があつたが、現に 今もあるにはあるが、その上に火の見る番所をつくり、今やつと出來上つたか終らぬか、まだペンキ塗りも終らぬ家が出來、もとの水槽は今やその役目を終つてゐるのです。

その代りに小さな motor がドーム内に据えられ、これが充分な壓力を與

へて十六呎半といふスペースを上下するに十分そこそこで動く様になつてゐます。

さて「横川」はといふと東塔から北へつき出てゐる鞍部で、Saddle と稱してゐるといふことで、別に建物はなく、散歩位に出掛ける所になつてゐるそうです。そこへゆく小路が Lover's lane といふ名前があるといふから振つてゐるでせう。

次の日、七月三日、ノイバウワー氏に合つて 36 時の radial velocity observation のことに關して話をうかゞひました。この人は1923年頃まで Ukiah で緯度観測をやつてゐたので、名前を記憶してゐましたが、その後 Lick observatory の南米 Santiago station へいつてゐられた由で、その身賣りの時までをられたそうです。

夕方36時へいつて、ノイバウワー氏の観測振りを參觀しました。マドロスパイプをくわへて、ブラリブラリしながら、シャベリ乍ら guide してゐる様子は見ものでした。正に大望遠鏡にふさはしい悠然ぶりでした。

その眞夜中十二時から Trumpler 氏がクロスレイで観測せられるので、それを見に出掛けてゆく。崖道づたひに急ぐと十分位要した 様でした。丁度本街道に出た時、フト見ると、沈みかけの月が正面にあつて、すぐ下のサンノゼーの町が銀色に光つてゐたのは實に 見事なものでした。トランプラー氏は既に来てをられ、直ぐ観測にかゝつて、focus をきめることから、field を探すこと、guiding の様子と親しく見ならつたことです。cluster の寫眞を二枚とられたが exposure は二十分位のものであつたけれども前後二時間位の時間を要し二時半頃終つて別れて歸ると、も早、月は没してうす暗く、星明りで道をたどると行手を急に かすめるものがあつたので、少々驚いたが、恐らく鹿公であつたのであらうと思つてゐます。

四日は fourth of July で、アメリカ人にとつては第一の公休日。我々は Livermore Rodes を 見にゆきたいとも 思つてゐたが、dormitory の連中が Dr. Menzel 一家と picnic をやるといふのでそれに 参加することにした。

即ち同勢十二三人で山から7哩程の Smith Creek へ泳ぎにいつたのである。そこには幾組が夏休みのため、テント持ちで出掛けてゐる連中で賑はつてゐた。獨立祭にはつきものゝ花火も山では法度であるが、こゝでは日がいつてから子供達が花火に興ずるやら、メンゼルのバンジョウで歌ふやらで歡をつくし、九時すぎて歸つて來たのである。

こんな風でリツクの生活が至極順調に愉快に始められたのを自分達のために喜んで頂きたい。尙ほ昨夜の觀覽日の有様を書けば complete であるが、もう食事の時間が來たので又の便に譲らせて頂きたい。只、食事のことで附加したいのは、この山では獨身者や我々の如き客分は dormitory にゐて、食事は毎食 boarding house の Mrs. Corona の家へゆくことになつてゐる。コロナといふ名前からして珍らしいでせうが、こゝへ來る連中は Dr. Paddock が host 格で、Secretary Miss Potwin, Computer の Miss Jones, 研究生の Miss Slocum Mr. Whiffle, 人夫頭兼大工の Osen 君、それと我々夫婦です。

七月六日

上 田 穰

Lick Observatory, Mt. Hamilton

降旗竹子氏を悼む

六月十九日に會員降旗竹子氏が永眠された。氏は此三月に同志社女專の英文科を卒業したばかりであつたが、有爲なる素質と理想を懷抱し乍ら空しくなつた事は本當におしく思ふ、卒業後の就職希望は天文臺の助手になる事であつたが、その方の話が未だ進捗しない内に病氣になり、郷里に歸つて三月廿五日に入院されてから、最後迄ずっと39°前後の發熱に苦しめられ乍らも、よく信仰に徹し其臨終は本當に立派なものであつた。私が支部幹事の資格に於て京都からわざわざ信州の松本迄彼女の病床を訪ねたのは六月十一日でした。私達は久し振に色々特に天文學の事など話し合ひましたが、別れるに際して彼女の殆ど唯一の傳言は在學中の友人に對して、